デーリー東北新聞社提供

デーリー東北
2021年（令和3年）3月11日（木曜日）（15）

東日本大震災10年

東日本大震災では、震災直後から自主防災組織や地域ボランティアが活躍した。防災に関する有識者やボランティア運営組織のプロから大きな災害時の対応や心構えなどを聞いた。

災害時の対応、心構えは 識者に聞く

〝空振り恐れず逃げる〟重要

八戸工業大教授 加藤雅也さん

避難シナリオ複数想定を

震災による大津波を受け、市民の「防災・減災」の意識は一層高まった。一方、震災の教訓を忘れないために、継続的な防災教育が不可欠となっている。海の構造物と波の研究を行いながら、地域の防災教育にも携わる八戸工業大工学部土木建築工学科の加藤雅也教授(59)は、複数の避難シナリオを想定するなど、有事への備えの重要性を指摘する。一問一答は次の通り。

（聞き手・金澤千優希）

―東日本大震災で発生した津波は、沿岸部に甚大な被害を与えた。

当時、北海道で教職に就いていたが、東北地方でも各地でハザードマップが整備されるなど、備え自体はあった。ただ、実際には想定を超えた被害が発生した。否定的な言葉として用いられがちだが、まさに「想定外」と言わざるを得ない状況だった。

―震災を経て、地震や津波への意識や考え方は変化したか。

被害を最小限に抑え、命を守るための「減災」という言葉が広く聞かれるようになった。土木分野から見れば、今後巨大津波が発生し、防波堤が仮に破壊されたとしても、60～80％は被害を抑えられるような「粘り強さ」を構造物に求めるなど、設計思想はこの10年で変わってきている。

―津波への備えとして求められることは。

ハザードマップで浸水の危険がある地域を把握しておくことはもちろん、行政が公表している避難所リストなどに目を通し、自宅や勤め先周辺の避難場所を把握しておくことが大切だ。

避難のシナリオを二つ、三つ考えておくことも重要。避難場所はどこか、その場所が使えなくなっていた場合はどこに逃げるのか、家族とはどこで合流するのかなど、あらかじめ決めておく必要がある。

―実際に大きな地震が来たらどうすればいい。

尋常ではない揺れを感じたら、空振りを恐れずに逃げることが最も重要だ。津波は陸に上がると洪水のような動きになり、自動車くらい（時速30キロ程度）のスピードになる。下り坂では威力が増すし、間口が狭い場所や建物の前は水位が上がる。

防災無線などで情報を得られればいいが、災害時は情報が入り乱れていることが多いので、まずは逃げることだ。情報を待って手遅れになることは避けなければならない。

―防災教室で強く伝えていることは。

とにかく津波を意識して「逃げる」ということを教えている。自分は大丈夫、この場所なら大丈夫という思い込みが危険。学校では先生が先導してくれるが、自宅では家族単位での判断が必要となる。多くの人が周囲にも避難を呼び掛けつつ、自らも逃げる「率先避難者」となってほしい。

有事への備えの重要性を強調する加藤雅也教授

※この記事・写真等は、デーリー東北新聞社の承諾を得て転載しています。